

八日市地方遺跡Ⅱ

—小松駅東土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

第5部 土器・土製品編

第6部 自然科学分析編

第7部 補遺編

2016.3

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は、小松駅東土地区画整理事業に係る八日市地方遺跡の発掘調査のうち、報告Ⅰを補完する調査報告Ⅱであり、そのうちの第3分冊 第5部 土器・土製品編と第6部 自然科学分析編、第7部 補遺編である。
2. 出土品整理及び報告書の作成は下記の分担により実施し、下濱が総括した。
《土器、土製品の実測作業》 榎田佐和子、山崎直子、下濱、横幕
《土器、土製品の分類作業》 國本久美子、下濱、横幕
《土器、土製品のトレース作業》 杉 直子、和楽如子、下濱、横幕
《土器、土製品の写真》 田邊朋宏、下濱
《木製品の写真》 下濱
なお、緊急雇用創出対策事業の一環として（株）太陽測地社、（株）パスコにより土器、土製品の洗浄・註記・分類・復元・実測・トレース作業を実施している。
3. 本書の編集は、榎田 誠指導の下、下濱が行い、執筆分担は第5部第Ⅰ章 榎田・下濱、第Ⅱ章 横幕、第6部第Ⅰ章 能城修一・佐々木由香・村上由美子、第Ⅱ章 小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男、第Ⅲ章 光谷拓実、第Ⅳ章 中塚 武・佐野雅規・村上由美子・許 晨曦、第Ⅴ章 宮田佳樹・南雅代・中村俊夫、第Ⅵ章 宮田佳樹 第Ⅶ章 宮田佳樹、第7部 第Ⅰ～Ⅳ章下濱、結語 榎田である。
また、第6部第Ⅰ章 能城修一・佐々木由香・村上由美子、第6部第Ⅱ章 小林和貴・佐々木由香・能城修一・鈴木三男、第Ⅲ章 光谷拓実、第Ⅳ章 中塚 武・佐野雅規・村上由美子・許 晨曦、第Ⅴ章 宮田佳樹・南雅代・中村俊夫、第Ⅵ章、Ⅶ章 宮田佳樹に玉稿をいただいた。記して 感謝の意を表したい。
4. 本書に示す土色はマンセル表色系に準拠している。
5. 本書に利用する時期は報告Ⅰの時期設定に準じており、八日市地方 1～3期（弥生時代前期～中期初頭）、八日市地方 4, 5期（中期前葉）、八日市地方 6～8期（中期中葉）、八日市地方 9, 10期（中期後葉）
合わせて、集落Ⅰ期＝八日市地方 4～6期、集落Ⅱ期＝ 6～8期、集落Ⅲ期＝ 9, 10期に相当する。
6. 発掘調査で出土した遺物をはじめ、遺構・遺物の実測図・写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
7. その他、本書の作成にいたるまで、以下の機関・団体・個人より協力・助言・指導をいただいた。記して感謝の意を表したい。（50音順、敬省略）
赤澤徳明、浅野良治、石川考古学研究会、石川日出志、石黒立人、伊丹 徹、伊藤 洋、伊藤雅文、宇野隆夫、上野 章、上原真人、金関 恕、亀井 聡、河合 忍、河合章行、木下尚子、楠 正勝、久住猛雄、工楽善通、後藤長平、小竹森直子、小林青樹、小林正史、坂井秀弥、佐古和枝、笹澤正史、設楽博己、篠宮 正、杉山拓己、関 雅之、高野陽子、高橋浩二、田嶋明人、永井宏幸、長友朋子、西田昌弘、橋本澄夫、馬場伸一郎、林 大智、樋上 昇、肥後弘幸、久田正弘、深澤芳樹、藤田三郎、本田秀生、前田清彦、宮本一夫、三好孝一、村上恭通、安 英樹、安中哲徳、山田昌久、湯尻修平、吉田 広、吉田 稔、米田克彦、若林邦彦、渡邊朋和



人面付土器

撮影：田邊朋宏



環濠 02 (13 地区 SD29) 出土土器

撮影：田邊朋宏



環濠 02 (17 地区 SD46) 出土土器

撮影：田邊朋宏



環濠 03 (17 地区 SD44) 出土土器

撮影：田邊朋宏



環濠 04 (12 地区 SD01) 出土土器

撮影：田邊朋宏



環濠 06 (11 地区 SD24) 出土土器

撮影：田邊朋宏



環濠 07 (11 地区 SD22) 出土土器

撮影：田邊朋宏



SX02 (17 地区 SD19) 出土土器

撮影：田邊朋宏



SX02・03 (28 地区 SD21) 出土土器

撮影：田邊朋宏



SX05 (15 地区 SD04B・C) 出土土器

撮影：田邊朋宏



SX06 (17 地区 SD27) 出土土器

撮影：田邊朋宏



12 地区 33-65-02K 出土土器

撮影：田邊朋宏



11 地区 SD08 出土土器

撮影：田邊朋宏



351 [S-907] 小松式

撮影：田邊朋宏



158 [S-36] 補修がみられる壺



457 [S-1160] 方形周溝墓に供献された壺



323 [S-170] 西日本系壺

撮影：田邊朋宏



1112 [S-616] 西日本系壺口縁

撮影：田邊朋宏



641 [S-87] 東海系細頸壺（貝田町式）



1041 [S-591] 絵画土器

撮影：田邊朋宏



土製加工円盤

撮影：田邊朋宏



土錘・土玉類

撮影：田邊朋宏



その他の土製品（分銅形土製品・ミニチュア土器・不明円盤類）

撮影：田邊朋宏



焼成粘土塊

撮影：田邊朋宏



1 [W9675] - 1



1 [W9675] - 2



1 [W9675] - 3



1 [W9675] - 4



3 [W33461]



4 [W34876]

木製品 1



2 [W34611] - 1



2 [W34611] - 2



5 [W9783]



6 [W23515] - 1



7 [W22995] - 1



7 [W22995] - 2



6 [W23515] - 2



7 [W22995] - 3



8 [W18955] - 1



8 [W18955] - 2



11 [W10041] - 1



11 [W10041] - 2



11 [W10041] - 3



9 [W21060] - 1



9 [W21060] - 2



10 [W24969] -1



10 [W24969] -2



13 [W10049] -1



13 [W10049] -2



12 [W11223] -2



12 [W11223] -1



12 [W11223] -3

第5部 土器・土製品編

序章 (檜田 誠・下濱貴子)

第1節 土器・土製品における調査から整理までの概略	2
---------------------------------	---

第I章 土器 (下濱貴子)

はじめに	5
第1節 環濠資料資料	8
第2節 方形周溝墓資料	14
第3節 その他の遺構資料	18
第4節 土器の系統分類について	161

第II章 土製品 (横幕 真)

はじめに	197
第1節 土製加工円盤	197
第2節 土錘・土玉類	203
第3節 その他の土製品	206
第4節 焼成粘土塊	208

序 章

1 土器・土製品の出土状況と総数

平成5年から平成12年にかけて実施した小松駅東土地区画整理事業に伴う発掘調査の総面積は32,556㎡で、土器および土製品の出土量は、コンテナ換算で総数3,903箱である。そのうち、旧河道からの出土資料が約4割、包含層および遺構資料が約6割を占めている。

現地での遺物の取り上げ方法は、遺構ごとにドット図作成を行ったものや、検出状況図を作成したものもみられるが、平成9・10年度の調査区では遺構密度が非常に高く、特に調査日数が限られた箇所に関しては、出土遺物を一括で取り上げて持ち帰ることしかできなかった遺構もみられる。8年にわたり何人もの担当者が携わる調査の中で、統一した取り上げ方法が実施できた訳ではない。

第1図は、各調査区の位置及び調査区ごとの出土コンテナ数を示したものである。第2図の遺跡全体図と合わせてみると、出土土器量がもっとも多い26地区は、旧河道の埋積浅谷が調査区の2/3を占めている調査区で、厚い堆積層及び大量の木製品の集積に比例した出土量を示している。



調査区	平成5～12年度 小松駅東土地区画整理事業																民間						
	I	II	III	2	4	6	8	11	12	13	15	16	17	18	20	26	27	28	31	総数	22	総数	
遺構(箱)																							
包含層含	22	27	31	23	91	21	771	163	147	92	64	601	29	6	72		121	13		2,294	46	2,340	
河川(箱)				92	9				48	310						1,104	46				1,609	153	1,762
面積(㎡)	690	1,300	3,901	250	2,627	880	3,450	1,130	2,713	1,920	3,520	2,080	2,350	3,480	520	1,159	586				32,556	1,300	33,856
箱/面積	0.03	0.02	0.03	0.12	0.03	0.02	0.22	0.19	0.17	0.08	0.17	0.01	0.002	0.34	0.09	0.10	0.02				0.12	0.15	0.12

*民間開発は平成18年度発掘調査実施、八日市地方遺跡Ⅲ発掘調査報告書に該当する。

第1図 調査区位置及び調査区ごとの土器、土製品資料数 (S=1/3,000)

河道に沿って展開する居住区域に着目すると、環濠が数条みられる 11 地区を筆頭とし、12, 13 地区と続く。集落は大雑把に言えば、西から東へと拡大しながら環濠掘削も波紋のように拡大させているが、11 地区は、集落として最盛期を迎える時期に環濠を貯木場とする木器生産や玉生産が集中的に行われた地区で、終焉期までの遺構もかなり重複した状況であることと関係している。一方、墓域のみの検出である 20 地区は、土器量の密度としては 11 地区の 1/10 であることがわかり、同遺跡内における土器廃棄・埋納にいたる空間利用の差が如実に表れている。

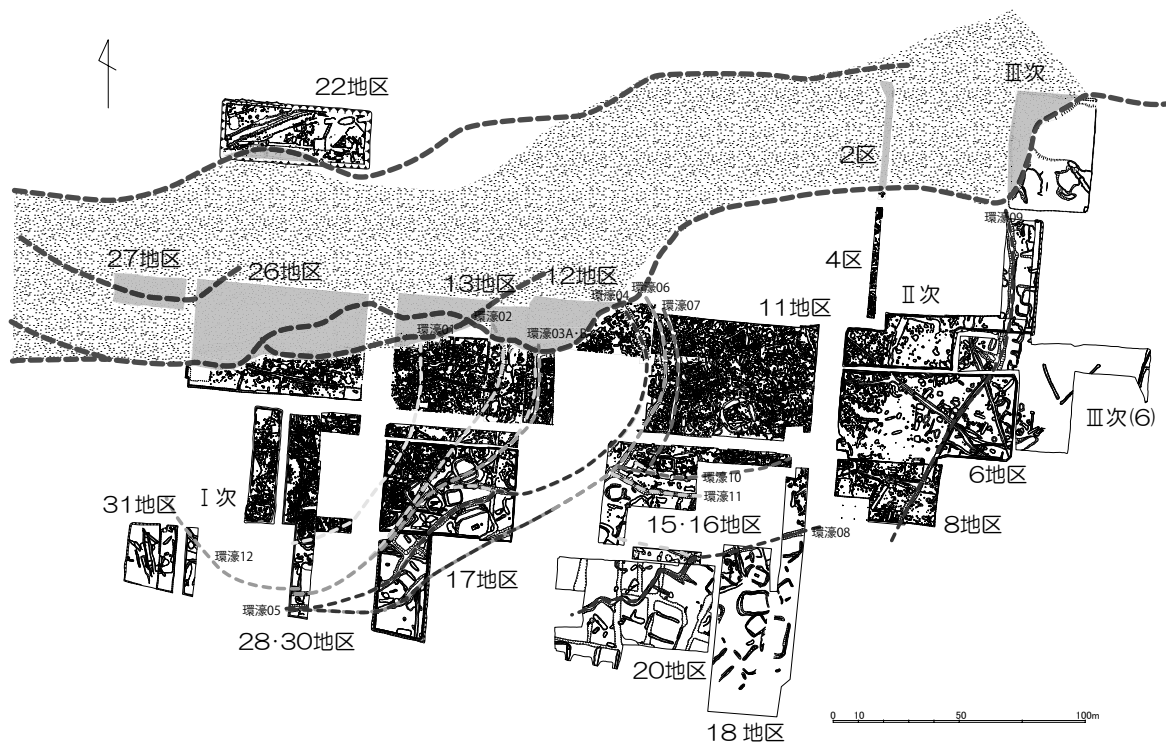
2 出土品整理の経過

(1) 八日市地方遺跡 I (2003) の刊行

発掘調査から出土品整理作業の着手に至る経緯と整理の方針については、平成 14 年 (2003) 刊行の八日市地方遺跡 I (以下「報告 I」という) に詳しいため、以下、概略を述べる。

平成 5 年度の発掘調査開始からまもなくして、調査の長期化と大規模化が想定されることとなり、平成 7 年度からは、発掘調査と併行して現地での整理作業にも着手した。土器洗浄と註記といった基本的な整理作業に作業員 2 名が従事するという小規模な体制であった。平成 9 年度以降には、調査箇所が膨大になるとともに、出土コンテナ数は総数 1,000 箱を超え、作業スペースの確保すら難しく、この体制でこなしていける状況ではなくなっていた。

本格的な整理作業に向けて取り組みを開始したのは平成 10 年度からである。遺物の種別ごとに担当者を決め、土地区画整理事業が終了する平成 14 年度を目途に、第 I 次報告書を刊行することを目指した。こうして、予算規模もある程度大きく、本格的な出土品整理作業へと移行したのである。加えて平成 11 年度～ 13 年度には、区画整理事業費で実施する作業だけでなく、緊急雇用創出事業を利用した土器洗浄、註記作業も実施することができた。



*詳細は八日市地方遺跡 II (第一部 遺構編) を参照されたい。

第 2 図 八日市地方遺跡全体図 (S=1/3,000)

土器の整理方針に関しては、「遺跡内の時期をすべて網羅している調査箇所から出土品整理作業を行い、まず、時間軸の設定を行う」ことを目指すこととした。そのため報告Ⅰでは、ほぼ全時期にわたる遺物が出土し、なおかつ層位的に取り上げを行っていた埋積浅谷（旧河道）の出土資料を中心に報告を行っている。その分析と検討に当たっては、単に出土層位別の資料羅列ではなく、土器の系統および様相の変遷との整合性を検証しながら進めている。そして、報告Ⅰで河道資料を中心におこなった時間軸設定の補足を、将来の遺構資料を中心とした報告と分析、つまり、今回の報告にゆだねるものとしたのである。

（２）本報告に至る経過

報告Ⅰにおいて時間軸設定を概ね確立した上で、平成 15 年度以降は、八日市地方遺跡Ⅱ（以下「報告Ⅱ」という）の刊行に向けて、集落内の遺構変遷の理解へと繋がるかたちを目指して整理と分析を開始した。

一方、平成 18 年には、区画整理事業区域内の未調査街区で、民間の共同住宅建設が計画され、1,300 m²の発掘調査が行われた。この発掘調査の報告書を報告Ⅲと位置づけ、報告Ⅱに先行するかたちで平成 20 年 3 月に刊行している。

さて、報告Ⅱに向けた作業は、環濠資料や方形周溝墓など遺構属性が明確なものから行い、次いで土坑資料へと整理を進めている。ただし、年間約 5,000 千円の市単独予算だけでは、土器や土製品、木製品、石製品も含めた膨大な量の出土品整理が行えたわけではない。新たに緊急雇用創出事業として平成 21 年度～ 23 年度の 3 ヶ年をかけ、土器を主対象とした総事業費 42,620 千円の事業が組まれた。これによって、遺構資料の洗浄、註記、分類までの工程をすべて網羅することが可能となった。

こうして、平成 14 年度の報告Ⅰから 10 年を費やして、ようやく報告Ⅱの刊行に漕ぎつけたわけである。刊行は複数年度に分けて行うこととし、平成 24 年度の第 1 部遺構編・第 2 部石器編に始まり、平成 25 年度には第 3 部製玉編・第 4 部木器編、そして 1 年をおいて平成 27 年度に、最終報告となる本書の刊行に至っている。

しかしそれでもなお、土器の復元作業は、あくまでも実測可能な形までとしており、今回掲載した資料は、「作業として実測できた資料」ということでもある。現実には、復元・実測可能な資料はまだ膨大に存在しており、加えて、未分類の旧河道資料は 1,300 箱を超えているのが現状である。これは、土器に限らず、石器や製玉資料、木製品にも言えることである。小松駅東地区土地区画整理事業に伴う発掘調査報告書は、本報告をもって完了することになるが、膨大な出土品すべてを網羅した報告ができたわけではないことをあえて明記し、将来に残された継続整理・研究の必要性を課題として確認しておきたい。

（３）八日市地方遺跡をめぐる研究と普及啓発

報告Ⅰが刊行されてから現在に至るまで、この間、様々な出来事があった。出土品の市指定から県指定、そして国指定へと着実に駆け上がり、その都度の節目で、展覧会や講演会、シンポジウムなど、市民に向けた啓発事業を実施してきた。長期化した報告書の刊行は、先述したような担当者の取り組みのみによって実現したわけではない。調査担当者の力量不足を補うためにも、研究者・研究機関等への資料提供を惜しまないことを共通の姿勢とした。市レベルの調査で、ここまで整理と研究、啓発活動が継続できたのは、発掘調査時から多くの研究者の方に支えられ、応援していただいた結果である。この点に関しては、本書末尾で再度、触れておきたいと思う。